岐阜市立女子短期大学研究紀要第５２輯（２００３年３月）

後期チャールキヤ寺院にまつられた神格と平面構成

－ホイサラ寺院との比較を通した考察－

A Study on the Relationship between Spatial Composition and Deities Enshrined in the Temple of *Later Chalukyas*

－A Comparative Analysis with the Temples build under the *Hoysalas* of *Dorasamudra*－

矢　口　直　道

Naomichi YAGUCHI

Abstract:

This paper discusses the spatial composition of *Later Chalukyas* in comparison with that of *Hoysalas*. In the previous paper, I presented the comparative study on the spatial composition between the temples of *Later Chalukyas* and *Hoysalas* in terms of the shapes, the walls and the arrangement of niches of the spatial units. This paper aims to clarify the characteristics of spatial composition adding the factor, *i.e.,* the analysis of deities enshrined in the *garbhagrha*. From the viewpoint of religious background, the combination of the deities is important, especially in the temples having parallel and asymmetrical arrangement.

１．はじめに

本稿は、前稿[i]に引き続き、後期チャールキヤ寺院の平面構成について、ホイサラ寺院との比較を通して考察するものである。前稿では、後期チャールキヤ寺院[ii]について、本殿の平面類型と本殿を構成する各室の平面形態、ニッチ、壁面の構成に着目して平面構成を分析し、その結果とホイサラ寺院の平面構成とを比較した。本稿では、前稿と対象を同じくし、これに加えて特に、非対称型平面、並置型平面でのホイサラ寺院、後期チャールキヤ寺院の相違について、寺院にまつられた神格と位置を分析し、宗教的背景を考慮した上で、後期チャールキヤ寺院の平面構成についての考察を深める。

２．宗派・神格別分類と平面類型との相関

まず 62 基の後期チャールキヤ寺院にまつられた神格を宗教・宗派別に分類する。シヴァ神をまつる寺院が 38 基と最も多く、次いで、シヴァ神、ヴィシュヌ神、スーリヤ神等を一つの寺院本殿に同時にまつる重層信仰寺院が 11 基、ジャイナ教寺院が 8 基で、ヴィシュヌ神が単独でまつられる寺院は 3 基のみである。またシヴァ、ヴィシュヌ以外に、イェーッランマ、サラスヴァティのいずれも女神をまつる寺院がそれぞれ 1 基ずつみられる。年代別にみると（表－１）、11 世紀にそれぞれの宗派で最も多くの寺院が建立されている。まず宗教・宗派別に平面類型との相関について分析する。

２－１．シヴァ寺院（表２［１］）

一軸型平面についてみると、ホイサラ寺院と同様に室が配置されるものが多数を占めるが、シルヴァールのムニーシュヴァラ寺院[iii]とローンのローカナータ寺院[iv]がホイサラ寺院と異なっている。シルヴァールの寺院はヴィマーナ脇に入口があるもので、このような構成はこの寺院以外にはみられない[v]（図－1）。ローンのローカナータ寺院はキッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院と非常によく似た構成を示すが、ローンの寺院では、ナヴァランガとナンディー堂の間にポルティコがなく別構造である点が異なっている（図－2）。

二軸型平面では、ガルバグリハの四方に入口が位置するウンカルのチャーンドラムーレーシュヴァラ寺院[vi]ような四方に入口を配置した平面類型を除き[vii]、ホイサラ寺院と同様の平面類

表１．宗派別寺院建立数

宗教・宗派		10 世紀	11 世紀	12 世紀	13 世紀	寺院数
ヒンドゥー教寺院	シヴァ寺院	8	23	6	1	38
	ヴィシュヌ寺院	-	3	-	-	3
	重層信仰寺院	-	9	-	2	11
	その他	-	1	1	-	2
ジャイナ教寺院		1	4	3	-	8
寺院数		9	40	12	1	62

型がみられる。ホイサラ寺院では、ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置するものが多いのに対し、後期チャールキヤ寺院ではナヴァランガの三方に入口が位置する寺院の方が多い。

非対称型平面をみると、ナヴァランガの北側にのみ入口がある寺院と、東、南側に入口がある寺院に分けて考えることができる。北側に入口が位置するアイホーレのヴェニヤヴァール郡第５寺院では[viii]、ナヴァランガの東側にガルバグリハが位置していて、一般的にナヴァランガの西側にガルバグリハが置かれるのと全く異なっている（図－3）。また壁面の様式も後期チャールキヤ朝以前のラーシュトラクータ朝との関連が指摘されるなど[ix]、この寺院については、他の王朝の寺院との関連を考慮に入れる必要があろう。この寺院を除く６基の寺院はナヴァランガの西側にガルバグリハ、東、南側に入口がある点が共通している。これは、西にガルバグリハが位置する一軸型平面にさらに南側に入口が設けられたものと考えることができる。このような非対称に配置される南側の入口について、シヴァ神が南の方位を統治する神であることとの関連性が指摘されている[x]。

一方、ホイサラ寺院では、上述のナヴァランガの西側にガルバグリハが位置し、南、東側に入口が位置する平面類型に加え、トゥルヴェーケーレーのムーレーサンカレーシュヴァラ寺院のように[xi]南側にのみ入口が位置する寺院がみられる（図－4）。

ホイサラ寺院でシヴァ寺院に特徴的にみられた並置型平面はみられないが、フーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院では[xii]、主ガルバグリハに三つのシヴァリンガを並置して安置している[xiii]。

２－２．ヴィシュヌ寺院（表２［1］）

ヴィシュヌ神のみがまつられる寺院は、以下の３基である。ハーヴェーリのヴィシュヌ寺院はナヴァランガ北側に入口が位置する一軸型平面[xiv]、フーヴィナハッダガッリのケーシャヴァスヴァミー寺院はナヴァランガの南側にガルバグリハが位置し、西、北、東側にポルティコが位置する二軸型平面[xv]、ローンのアナンタサーイ・グディは[xvi]、ナヴァランガの西側にガルバグリハ、北側に入口が位置する非対称型平面である[xvii]。

２－３．重層信仰寺院（表２［2］）

重層信仰寺院にまつられた神格をみると、ホイサラ寺院同様、ナヴァランガ西側のガルバグリハには主神としてシヴァリンガがまつられており、北側にはヴィシュヌ神、東側にはスーリヤ神がまつられる傾向にある。

サヴァディのトリプルシャ寺院は一軸型平面であるが、ひとつのガルバグリハ内にシヴァ神、ヴィシュヌ神、ブラフマー神のヒンドゥー教の三大神がまつられている[xviii]（図－6）。　二軸型平面をみると、ホイサラ寺院同様、ナヴァランガの西側にシヴァ神をまつる主ガルバグリハが位置し、南北にそれぞれ、シヴァ神、ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハが位置するバッリガンヴェーのケーダレーシュヴァラ寺院がある一方で[xix]、スーディのジョーグ・カラサダ・グディでは、南北に入口のあるナヴァランガの西側にシヴァ神をまつり、東側にはスーリヤ神をまつる[xx]（図－７）。また、平面の対称性に着目すると左右対称であるが、非対称に神格が配置されている寺院がみられる。ナヴァランガの西側にシヴァ神、東側にスーリヤ神をまつるガルバグリハが位置し、南側にのみ入口があるもの（フーリのアンダケーシュヴァラ寺院）、南側の入口を除いて三方にガルバグリハが位置する平面類型がみられる（ラックンディのクンベーシュヴァラ寺院[xxi]）。

非対称型平面の寺院には以下の三つの平面類型がみられる。まず、ラックンディのカーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院のように[xxii]、ナヴァランガの南に入口があり、シヴァリンガをまつる主ガルバグリハが西側に、スーリヤ神をまつるもう一つのガルバグリハが東側に位置するものが挙げられる。この平面類型は、シヴァ寺院で、ナヴァランガの西側にガルバグリハが位置し、東、南側に入口が位置している寺院の東側にスーリヤをまつるガルバグリハが配置されたものと考えることができる。カーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院では[xxiii]、スーリヤ神をまつるガルバグリハとナヴァランガの間にマハーマンダパに位置している。ナヴァランガの南側の入口は建立者であるチャールキヤ王のための特別の入口であると考えられている[xxiv]。この平面類型はホイサラ寺院ではみられない。

次に、ハルティのウマ・マヘーシュヴァラ寺院ではマハーマンダパの周りに室が配置され、西、北側にシヴァ神、東側にスーリヤ神が位置し、マハーマンダパの南側に入口が設けられている[xxv]。ホイサラ寺院で、このように室を配置するものはないが、入口とガルバグリハの位置と、そこにまつられた神格に着目すると、ケーレーサンテーのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院のような寺院と同様であるとみなすことができる[xxvi]（図－８）。

最後に、アマラゴールのバナサンカーリ寺院では、ナヴァランガの西、北側にシヴァ神、ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハがあってそれに正対する位置に入口が設けられ、ナヴァランガ中央でそれぞれのガルバグリハに至る軸線が交差している[xxvii]。

一方、ホイサラ寺院では、上述の平面類型に加え、ナヴァランガの一方に入口があって、入口の正面と、左右いずれかにガルバグリハが配置されるものがみられる[xxviii]。

２－４．ヒンドゥー教の他の神をまつる寺院（表２［2］）

バーダーミのイェーッランマ寺院は、ガルバグリハがナヴァランガの西側に配置される一軸型平面、ガダッグのサラスヴ

ァティ寺院はトリクテーシュヴァラ寺院の南に位置し、ガルバグリハがナヴァランガの南側に配置され、ナヴァランガの西、北、南側に入口が配置される二軸型平面である。

２－５．ジャイナ教寺院（表２［２］）

一軸型平面ではホイサラ寺院と同様、ナヴァランガの西側にガルバグリハが位置するものがみられる。二軸型平面では、ナヴァランガの一方に入口があって残る三方に三神をまつるもの、これに加えマハーマンダパの左右にもそれぞれひとつずつの神格をまつるものがみられる。これらのジャイナ教寺院は、ホイサラ寺院同様、左右対称に神格が配置されるものと理解できよう。

一方、アイホーレのチャランティ・グディは、一軸型平面が並置されたものと考えられるが、ホイサラ寺院とは構成が異なる[xxix]。アイホーレのヴィルーパークシャ寺院近くのジャイナ寺院で、もともとナヴァランガとその西側、北側のガルバグリハで構成されていたものに、南側のガルバグリハ、東側のガルバグリハとその間のマハーマンダパが増築され、現在非対称となっている[xxx]。

３．考察

以上、宗教、宗派別に概観したが、ヒンドゥー教のシヴァ派、重層信仰寺院以外については事例が少なく、同様に論じるわけにはいかない。ジャイナ教寺院については上述のように、並置型平面などいくつかの例外をのぞきホイサラ寺院とほぼ同様の平面類型に分類できる。ここでホイサラ寺院との相関について問題となるのがシヴァ寺院と重層信仰寺院である。一軸型、二軸型平面はホイサラ寺院とほぼ同様とみなすことができるが、並置型、非対称型平面については十分考察する必要がある。

まず並置型平面について、ホイサラ、後期チャールキヤ寺院で異なる宗派にみられる点について若干の考察を加える。前者では、ナヴァランガを共有して並置されたものがシヴァ寺院にのみみられ、別棟で近接して建立されたものが、それぞれシヴァ神、ヴィシュヌ神をまつる重層信仰寺院であったのに対し、後期チャールキヤ寺院ではナヴァランガが壁で仕切られているものがジャイナ教寺院にみられる。建立年代をみると、ホイサラ寺院の並置型平面の場合、建立年代の判明している最初の遺構、ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院は 1120 年前後に建立されているが、後期チャールキヤ寺院の並置型平面、アイホーレのチャランティ・グディは 1119 年に建立されている。ほぼ同年に建立されたこれら二つの寺院の影響関係は判明しておらず、同様の平面類型の寺院が周辺の王朝によって建立された寺院に見られることからこれらをさらに考察する必要があろう[xxxi]。

次に非対称型平面についてガルバグリハの数にしたがってみることにする。ガルバグリハが一つの場合、後期チャールキヤ寺院では、南、東側に入口が設けられ、西側にガルバグリハが位置している平面類型がシヴァ寺院に特徴的に見られる。ホイサラ寺院では、南側にのみ入口が配置されるものが非対称型平面の半数を越え、その他は後期チャールキヤ寺院のように二方向に入口が配置されている。

ガルバグリハが二つの場合、後期チャールキヤ寺院では重層信仰寺院に限られている。ナヴァランガの一方に主ガルバグリハが位置し、その反対側にもう一つのガルバグリハが配置されるものは、西側にシヴァ神、東側にスーリヤ神がまつられる。このような寺院は 11 世紀に 3 基建立されているが、ホイサラ寺院では、1173 年に建立されたコーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院[xxxii]にしか見られない（図－９）。また、アマラゴールのバナサンカーリ寺院では[xxxiii]、二つのガルバグリハに至る軸線が交差するように室が配置され、シヴァ神を西側に、ヴィシュヌ神を北側にまつる。このような平面類型は、ホイサラ寺院ではベールールのカッペーチェーンニガラーヤ寺院をはじめ数例がみられた（図－１０）。建立年代をみると、アマラゴールでは 1119 年でベールールの 1117 年よりも遅い。このような軸線が交差する平面類型には、ホイサラ寺院の影響を考慮に入れる必要があろう。一方ホイサラ寺院では、一方に入口が位置し、残る二方にガルバグリハが位置している非対称型平面がみられる。これらは、シヴァ、ヴィシュヌをまつる寺院か、ヴィシュヌ神のみをまつる寺院に見られ、ともに 12 世紀以降の建立である。後期チャールキヤ寺院ではヴィシュヌ神をまつる寺院がほとんどなく、シヴァ神、ヴィシュヌ神をまつる寺院にもホイサラ寺院の影響が考えられることから、12 世紀以降盛んになったヴィシュヌ信仰にともない現出するようになった平面類型と位置付けることができよう。

しかし、ホイサラ寺院では、このような平面類型のヴィシュヌ寺院は少数で、本稿２．で指摘したように、ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置する二軸型平面がほとんどである。これはシヴァリンガで表現されることが多いシヴァ神とは異なり、ヴィシュヌ神はアヴァターラ等の様々な図像的表現が可能で、その幾つかをひとつの寺院にまとめてまつることの合理性を考えることにより理解できる。

ガルバグリハが三つの場合は重層信仰寺院に限られる。シヴァ神、ヴィシュヌ神、スーリヤ神の三神をまつる寺院は、後期チャールキヤ、ホイサラ寺院とも、ナヴァランガの南側に入口が配置され、西側にシヴァ神をまつる主ガルバグリハが位置している。このような寺院の建立年代をみると、後期チャールキヤ寺院では 11 世紀に、ホイサラ寺院では 11 世紀から 13 世紀にかけて建立されており、11 世紀にはこのような平面類型が確立していたものと考えられる。

さて、既報では[xxxiv]入口と主神をまつるガルバグリハの位置に着目して、12 世紀以降に建立されるようになった、南側に

入口が位置し、西側にガルバグリハが位置する非対称型平面のシヴァ寺院には、シヴァ、ヴィシュヌ、スーリヤの三神をまつる重層信仰寺院の影響がうかがえる点を指摘した。後期チャールキヤ寺院をみると、西側にガルバグリハが位置し、東、南側に入口が位置するシヴァ寺院が、11 世紀以降建立されている。これらの相関を考慮に入れると、12 世紀以降の非対称型平面は、11 世紀の平面から東側の入口がなくなり、南側のみになったとも考えることができるのである。

４．まとめ

ホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院は類似したヴィマーナ外壁の分割が指摘されてきた。平面構成の分析を通してみると、双方の平面類型はほぼ同様の構成であると考えることができ、相互に影響関係が認められる。またナヴァランガの壁面はホイサラ寺院と同様に、ガルバグリハを強調するように配置されている様子がうかがえる。これらはホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院にのみ共通する特徴であるのか、他の王朝によって建立された寺院についてさらに検討が必要である。

一方、平面形態についてみると、ホイサラ寺院では正方形を規範としてひとつの機能にひとつの室を当てるなど、画一化した平面構成になっており、後期チャールキヤ寺院との比較を通してみたホイサラ寺院の平面構成の特徴であろう。

本稿３．で、ホイサラ寺院に特徴的にみられた南側に入口が位置し、西側にガルバグリハが位置する非対称型平面のシヴァ寺院には重層信仰寺院の影響が認められる一方で、後期チャールキヤ寺院に特徴的にみられた入口が東、南側に位置するシヴァ寺院との関連も考慮に入れる必要があることを指摘した。シヴァ派、ヴィシュヌ派の関係からみると、前者はシヴァ派、ヴィシュヌ派の共存というよりも、それに反したセクト主義に基づくものであると考えることができる。このようにみると、後者もシヴァ寺院からシヴァ寺院への影響関係である点に注目すると、シヴァ派、ヴィシュヌ派の共栄を図ったものではなく、ヴィシュヌ寺院の影響を受けずにセクト主義に基づいているものと捉えることもできよう。

註

[i] 拙稿「後期チャールキヤ寺院の平面構成　－ホイサラ寺院との比較を通した考察－」、岐阜市立女子短期大学研究紀要第 51 輯、平成 14 年。以下「拙稿 1」。

[ii] 本稿では、前稿に引き続き、後期チャールキヤ朝のもとで建設され、M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996, pp. 3-217.（以下、EITA）に平面図が記載された 62 基の寺院を後期チャールキヤ寺院と呼ぶ。

[iii] EITA pp.84-86, fig. 58.

[iv] EITA p.15, fig.4.

[v] 後期チャールキヤ寺院の他に、ヴィマーナ脇に入口が設けられている寺院は、筆者の知る限りではタンジャヴールのブリハデーシュヴァラ寺院、ガンガイコーンダチョーラプラムのブリハデーシュヴァラ寺院があるが、これらは規模が大きく後期チャールキヤ寺院と同列に比較するわけにはいかない。これらの寺院はそれぞれ 11 世紀にチョーラ王が首都建設に際して建立した大伽藍である。

[vi] 拙稿 1、図－４。

[vii] EITA pp.155-160, fig. 101.

[viii] EITA pp. 24-25, fig. 12.

[ix] EITA pp. 25-27, fig. 13.

[x] A. Sundara, "Two Temples in Dharwad District and the Impact of the Lakula and Kalamukha Saiva Sects", M. S. Nagaraja Rao(Ed.), *The Chalukyas of Kalyana* (Seminar Papers), 1983, Bangalore, pp. 171-174.

[xi] MAR 1934, p. 28, pl. IX.この寺院は後期チャールキヤ朝の時代に建立されているが、後のヴィジャヤナガラ朝、その後の時代にも増改築されている。

[xii] 拙稿 1、図－７。

[xiii] EITA pp. 209-211, fig. 135.

[xiv] Cousens, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese District, Calcutta*, 1926, pp. 85-87, plate LXXVI.

[xv] EITA pp. 207-208. fig. 133.

[xvi] 拙稿 1、図－8。

[xvii] EITA pp.36-37, fig. 24.

[xviii] EITA pp. 114-116, fig. 77.

[xix] EITA pp. 160-162, fig.102.

[xx] EITA pp. 50-53, fig. 37.

[xxi] EITA pp. 100-102, fig.68.

[xxii] EITA pp. 95-100, fig. 66, Cousens*, op. cit.*, pp. 79-82, pl. 112.

[xxiii] 拙稿 1、図－9。

[xxiv] EITA p. 96. ここではヴァーストゥシャーストラに根拠を求めているが、どのヴァーストゥシャーストラなのかは明らかではなく、この記述があるかどうかの確認はとれていない。

[xxv] EITA pp. 74-77, fig.53.

[xxvi] MAR 1945, pp.72-74, pl. XIII.

[xxvii] 拙稿１、図－6。

[xxviii] 例えば、ナラシプラのヨーガナラシンハ寺院や（MAR 1947-56, pp. 37-38, pl. XIX）、カルケーレーのバッレーシュヴァラ寺院（MAR 1945, p. 41, pl. VI）。

[xxix] 拙稿 1 参照。

[xxx] EITA pp. 30-32. fig. 20.

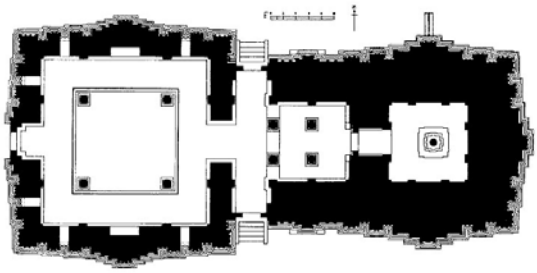
[xxxi] ホイサラ寺院同様の平面類型を示す並置型寺院は後期チャールキヤ寺院にはみられないが、1175 年にカダンバ朝のもとで建立された、デーガンヴェーのカッラーグディは、二つのガルバグリハが並置され、ナヴァランガでつながっている。この寺院ではホイサラ寺院とはナヴァランガのアンカナの分節が異なり、９分割された正方形が三つ並置され、重なる部分がない。EITA pp. 244-247, fig. 153.　また 800 A. D. 頃の建立の後、17 世紀まで増築が繰返されたナンディーのボーガナンディーシュヴァラ寺院は、東西軸に沿ってそれぞれシヴァリンガをまつる寺院が南北に別棟で並置されている。MAR 1932 pp. 65-68.

[xxxii] MAR 1333, pp.45-52, pls. X-XII.

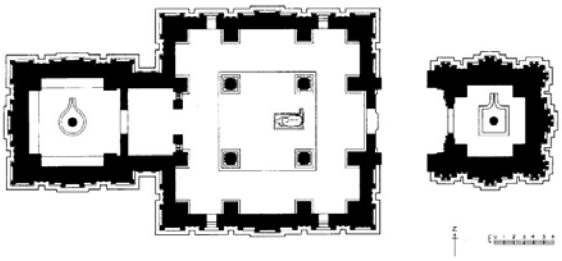
[xxxiii] 拙稿 1、図－６。

[xxxiv] 拙稿、「まつられた神格とそれらの位置からみたインド・ホイサラ寺院の類型学的考察、日本建築学会計画系論文集　第 511 号、pp. 201-208、1998 年 9 月。

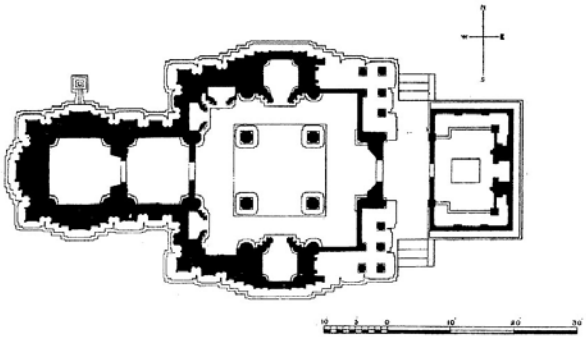
（提出期日　2003 年 3 月 5 日）



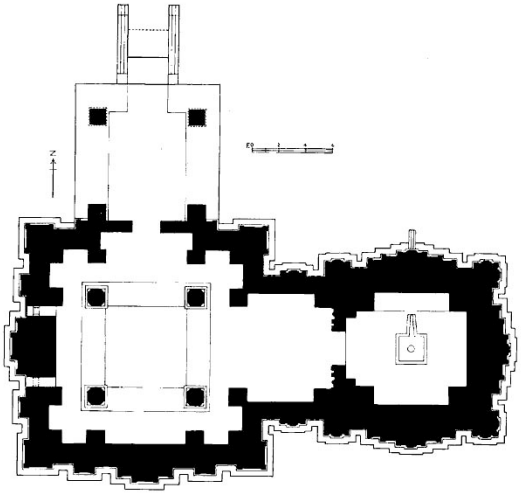
図－１．シルヴァールのムニーシュヴァラ寺院、平面図。EITA fig.58 をもとに筆者作成（以下同様）。



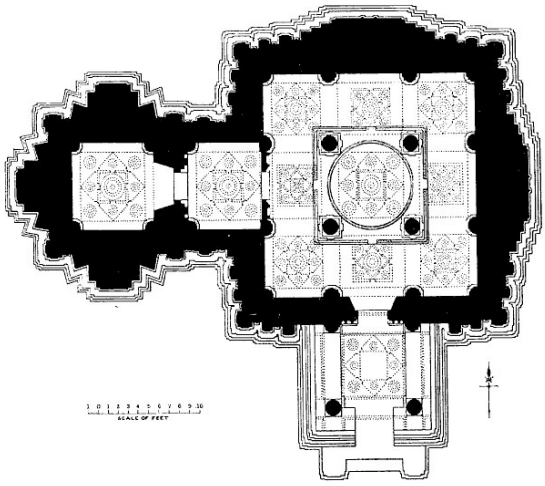
図－２．ローンのローカナータ寺院、平面図。EITA fig.4.



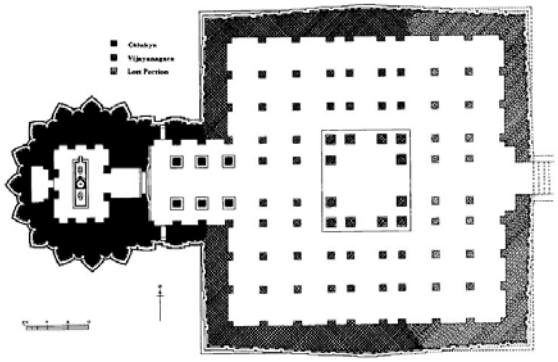
図－３.キッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院、平面図。EITA fig.185、MAR 1915 pl.X.



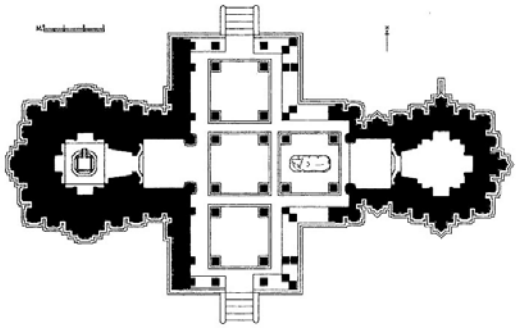
図－４．アイホーレのヴェニヤヴァール群第 5 寺院、平面図。EITA fig.12.



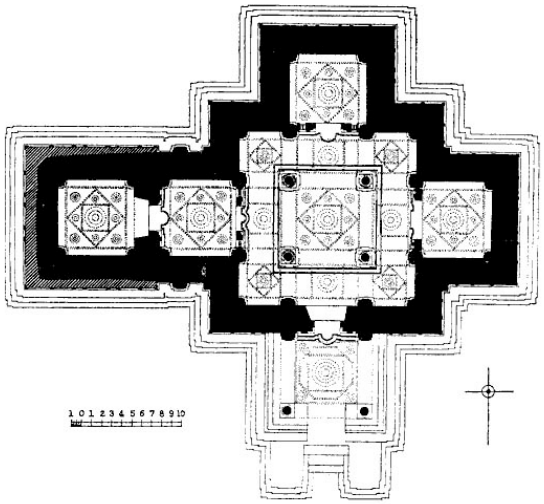
図－５.トゥルヴェーケーレーのムーレサンカレーシュヴァラ寺院、平面図。MAR 1934, pl.IX.



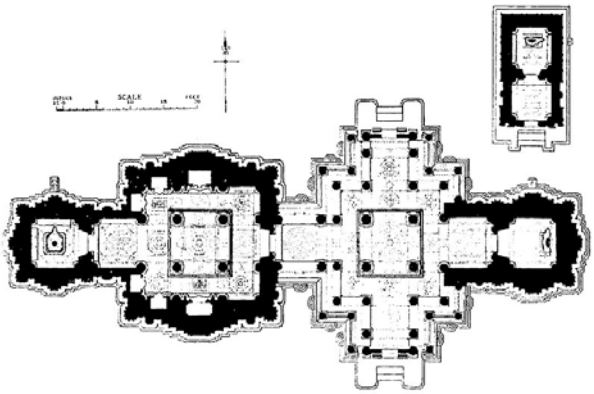
図－６．サヴァディのトリプルシャ寺院、平面図。EITA fig.79.



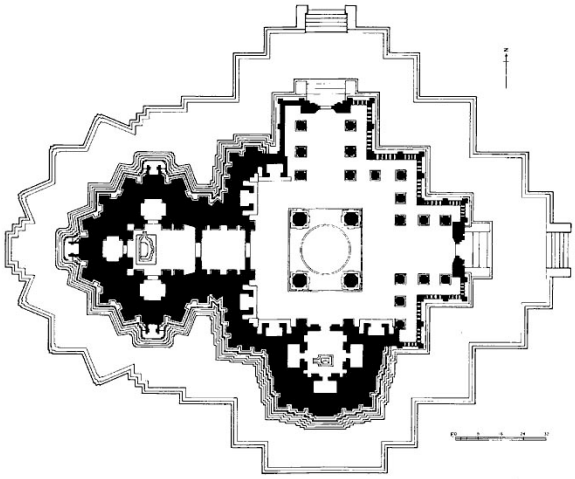
図－７．スーディのジョーグ・カラサダ寺院、平面図。
EITA fig.37.



図－８. ケーレーサンテーのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院、平面図。MAR 1945, pl. XIII.



図－９．コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院、平面図。MAR 1933, pl.X.



図－１０．ベールールのカッペーチェニガラーヤ寺院、平面図。
EITA fig.171, Narasimhachar, R., The Kesava temple at Belur, Pl.II.

表2[1]. 宗派別に見た平面類型と建立数

宗教・宗派	平面類型(模式図)														寺院数
	一軸型			並置型		二軸型					二軸型(神格非対称)		非対称型		
シヴァ派		4	12		—	(クッパトゥール)	1		2	19		—		1	7	38
		5					6		1					4		
	(ローン)	1					3		2					2		
		1					1	(ラクシュメーシュヴァラ)	1							
		1					1	(フーリ)	1							
ヴィシュヌ派		1			—		1		1			—		1		3

表2[2]. 宗派別に見た平面類型と建立数

宗教・宗派	平面類型(模式図)												寺院数
	一軸型			並置		二軸型			二軸対称(神格非対称)			非対称			
重層信仰		1	1		—	(バッリガンヴェー)	1	2		3	4		2	4	11
							1			1			1		
													1		
その他のヒンドゥー教		1			—		—			1			—		2
ジャイナ教		1	2		1		1	3		—			1	2	8
		1					1						1		
							1								